

書 評

EJ ヒュース 著／植村研一 監訳

うまい医学論文の準備と作成

亀山 正邦 (住友病院院長)

「医学論文の書き方」について解説した本はすでに幾つかあり、私どもはそれぞれに関心をもって読んでいる。しかし本書を通読して感心したのは、論文執筆の目的と方法とをきびしく規定し、紹介していることである。まず、何を言いたいのか、論文としての価値はどうか、過去の報告とダブってはいないか、読者は誰なのか、どの雑誌に投稿するつもりなのか、そのための書式はととのっているのか—この6つの設問から出発している。文献検索には、最新の方法が詳細に載っている。共著者の決め方、論文の引用、掲載許可を得るための書式（英文の実例）、なども大いに参考になる。

何よりも重要なのは、科学論文としての構成と、その証拠の提出法について多くの紙面を費やしていることである。論文では、「問いを、最初に明確にする……この原則は、研究論文、総説にかかわらずすべての論文に通じる」。序文、材料と方法、結果、考察と結論、の起承転結を明らかにすることは当然である。「現在、多くの雑誌は解答を知るために読者に論文を最後まで読ませることを強いたり……しない。それよりも結論を抄録やまとめとしてタイトルページにもってくる」。このようなことを含めて、発表を予定している雑誌の投稿規定をよくチェックしておく。症例報告の書き方、総説、論説、書評、編集者への手紙など、各部門について注意点が書かれている。書評は、問いと証拠と解答といった論証の

要素を備えていなければならない!! という。

本書後半の180頁は、具体的な論文の書き方についての解説である。ことに、抄録の書き方の見本は参考になる。よい論文は何度も書き直されている。「わたしの知っている医学研究者の多くは、いつも原稿をだいたい5回位は書き直した」という。「すべての共著者は、一度は初めの頃原稿に目を通し、書き直しについて助言すべきである」。よい科学論文の特質は、流麗・明快・正確で効率的であり、かつ洗練されていることにある。明快な文章にするための実例（英文とその訳）とが示されている。case と patient, incidence と prevalence, various と varying など、知っているつもりで日常しばしば誤用される言葉への注意書きにもみられるように、本書ではいたるところに、適切な例文があげられている。male, female の使い方なども留意すべきであろう。書式、図、表についての指摘と注意も、懇切である。いよいよ論文が出来上がって投稿するまでの検討点、投稿後の編集者とのやりとり—即時に受理された著者の場合でさえも、その表現法を改善するよう書き直しを求められるのが普通である。……その要請を実行しなくてはならない—要するに腹を立てるな、ということであろう。よくこなれた名訳である。医学論文に関係する人びとの必読の書であると思う。

(A 5 頁 292 1994 定価 3,090 円(税込) 医学書院 刊)